

日本地衣学会

ISSN 1347-3085

No.9

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次 雑記

ヘリトリゴケ雑記 / 梅本信也	31
ニュース.....	32

雑記 Miscellanea

ヘリトリゴケ雑記

日付は 2001 年春から随分と逆行するが、20 世紀末の 1990 年、紀伊半島南部地方は合計 4 回にわたるパワフルな大型台風の洗礼を受けた。なかでも 9 月 19 日に「観光」に訪れた台風 19 号による被害は甚大であり、強風や豪雨に慣れている地元の方々でもあまり記憶がないくらいの凄絶な結果をこの台風はもたらした。半島南端沖にある紀伊大島では、強烈な風送によって照葉樹林の鬱蒼とした樹冠はむしり取られ、枝葉という枝葉はもぎ取られ、さらに台風通過時に発生した無数の竜巻によって老樹であっても株ごと垂直に抜き取られた。ある地区では民家の屋根が吹き飛ばされて隣家の屋根上に着陸した。また、農業用ビニルハウスは鉄製パイプごと海上に吹き飛ばされた。

紀伊大島の中央部にある京大亜熱帯植物実験所での台風被害も甚大で、亜熱帯植物を保存してきた 3 棟のガラス温室の被害は著しく、全てのガラス板が吹き飛ばされ、一部の鉄骨が飴のようにねじ曲がった。周辺をくまなく調べたが、ガラス片はどこにも見当たらなかった。温室の早急な復旧工事が必要であったが、予算不足だから何かの理由で温室は剥き出しの骨のまま放置され、使用禁止となった。

旧温室の撤去とガラス温室の新築の工事は、紆余曲折を経て 1997 年に開始され、半年後に竣工の運びとなった。その間、京大本部構内ならば専門の事務官または技官が工事現場の立会人となるのだが、遠隔地の附属施設

では人手が足りない。そこで、学部学生の頃に図学なども修得し、設計図も読める便利人に白羽の矢が立った。つまり私である。立会人という仕事は、工事の監視役である。設計図通りに部品が使用され、適切に各工程が進捗するかを見守るのである。後に見えなくなる部分はとくに念入りに設計内容と照合する。朝 7 時半頃からやってくる職人さんと心を一体化させることが重要である。血液型を記載したヘルメットを被り、夕方 5 時前まで付き合うのである。しかし、元来聞き取り調査が得意な私にとって、この体験は重宝となった。種々の問いかけに対して、職人さんらは懇切丁寧に教えてくれた。職人さんの知識や知恵、趣味は多岐にわたり、かつ、体験に基づく本当の本物であった。学会という世界の特殊性をつくづく考えさせられた。

1999 年秋に別の予算が確保できたので、私が以前から計画していた樹冠観測塔を実験所の林内に建設することになった。これは高さが約 16m で、照葉樹林樹冠を上から観察するための装置である。塔の建設には 2 年前に知り合った職人さんらに来てもらった。気心の知れた関係とは良いものである。さらに、2000 年の秋には希少生物の定着過程を観察するための浅いプールを建設することになった。この工事も例の職人さんらに来てもらった。

ある日の工事の休憩時間にたまたま古座川一枚岩の話題となった。一枚岩を絶賛し近くに別荘まで建てた故人・司馬遼太郎のこととか、地方に伝わる伝説の話、ラ

ン科植物の漸減の話とか、強風時に現れて崖に衝突するという青い火の玉「風の玉」の話とか、話の弾みで、一枚岩の崖表面に展開するある種の物体を計りたいという相談を私は持ちかけた。対岸から測量してみようとか、気球を仕立てて計る方法とか超大型クレーンをレンタルしてゴンドラから計ろうとか、ラジコン機を開発して測量しようとか、私は思いつくことを取り留めもなく羅列し始めた。その時にある職人さんがつぶやいた。共通

語に訳すと次のようになる。「一枚岩の崖の上からザイルでぶら下がって、その物体を計ってあげようか。」まさに天からの御啓示である。しかも報酬などまったく不要だという。じつは、の問題点(ヘリトリゴケ雑誌[本誌7号p.25]を参照)はすでに「人脈」によって解決していたのだ。(続く)

(梅本信也：京大亜熱帯植物実験所)

ニュース News and Announcements

本会共催市民実験講座報告

秋田県立大学生物資源科学部では昨年度から市民実験講座「地衣類を培養してみよう」を2回(募集人員4名程度/回)開講している。今年度学会が発足したのを受けて、秋田県立大学生物資源科学部と日本地衣学会との共催で市民実験講座「地衣類を培養してみよう(第3回)」を9月29日(日曜日)に開催した。すでに開催された2回の講座では本会会員が4名参加している。今回、本会会員の竹仲氏(神戸薬科大学)と大江氏(仙台市在住)、および秋田県立大学学生2名のあわせて4名が9時半からヤマトキゴケとコアカミゴケを用いた胞子放出・発芽実験と、午後のフィリツメゴケとコフクレサルオガセを用いた組織培養実験にテキスト片手に参加した。なお、テキストの希望があれば郵送しますのでご連絡下さい。

(山本好和：秋田県立大学)

日本分類学会連合公開シンポジウム

日本分類学会連合に本会も加盟しましたが、その連合の第2回公開シンポジウムが、2003年1月11日(土) - 1月12日(日)にかけて国立科学博物館分館(東京都新宿区百人町3-23-1)において開催されます。第1部は「日本の生物はどこまでわかっているか：既知の生物と未知の生物」(1月11日13:00-17:30)、第2部は「ヨーロッパが所蔵する日本産生物タイプ標本 - 日本の生物多様性研究発展の鍵」(1月12日10:00-15:00)となっています。詳細については連合のホームページ(<http://www.bunrui.info>)をご覧ください。

(岡本達哉：学術交流委員長)

2002年度の記録

- 2月17日：設立総会(高知学園短期大学)、評議員会
- 3月30日：ニュースレター創刊号発行(2002年度は1号から9号発行、合計32ページ)
- 5月27日~6月9日：第1回メール評議員会
- 7月27~28日：設立記念国際シンポジウム、第1回大会、評議員会(神戸薬科大学)
- 7月30日：Lichenology創刊号発行
- 10月5~6日：第1回観察会(入笠山周辺)
- 12月17日~2003年1月5日：第2回メール評議員会
- 12月27日：Lichenology1巻2号発行(予定)
(山本好和：庶務幹事)

今年最後のニュースレターをお届けします。来年は、より多くの方々にメッセージをいただくと思っています。では良いお年を。(編集委員長)

複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌7号26ページに。

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see no.7, p.26 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 9号

発行日：2002年12月26日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄
発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城巾野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内